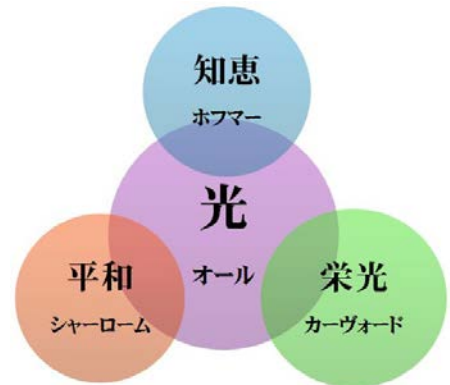


シャハイナ・グローリーの諸相 (5)

【聖書箇所】 黙示録 21 章 1～7 節、22～23 節

ベレーシート

●永遠において最も重い事柄が目に見える形で現わされることを、「神の栄光の現われ」と言います。その現われを「シャハイナ・グローリー」と呼んでいます。その栄光の現われは、「光」の概念である神の永遠のご計画と密接にかかわっており、それらは神の知恵によらなければ理解することのできないものです。なぜなら、それは「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして人の心に思い浮かんだことのないものだからです。」(1コリント 2:9)。さらに、神の完全な「平和」(シャーローム)が加わることで全体が一つに結び合わされます。ヘブル語の「シャーローム」は非常に内容の豊かな意味を持っており、すべての領域における「充溢」を意味しています。とても言葉では言い表せない神の究極の目的が完成した状態を意味しています。今回、取り上げることになる「聖なる都」「新しいエルサレム」は、これらのすべてがキリストにあって実現している世界と言えます。



●今回は、イエシュアが地上再臨されて実現するメシア的王国(千年王国=御国)の中心地であるエルサレムに現わされるシャハイナ・グローリーについて取り上げました。メシアなるイエシュアが地上において統治されるエルサレムでは、預言者ゼカリヤが語っているように、「夕暮れ時に、光がある」(14:7)という、つまり、昼もなく、夜もない、長い連続した「ただ一つの日」(「ヨーム・エハッド」 יּוֹם־אֶחָד)となります。つまり、沈むことも消えることもない不思議な栄光の光がエルサレムを覆っているのです。それはまさに、旧約の荒野における主の幕屋の上にあったシャハイナ・グローリーである「雲の柱、火の柱」のようです。

●今回は、メシア的王国の後に来る最終ステージとなる「永遠の御国におけるシャハイナ・グローリー」について学びたいと思いますが、基本的に、旧約における終末預言は「メシア的王国」(千年王国)に関するものと言えます。しかしその「メシア的王国」も、神のご計画の最終ステージとなる「永遠の御国」の「型」となっているのです。ちなみに、今、「永遠の御国」ということばを用いましたが、ヘブル人への手紙 12 章 28 節では「永遠の御国」のことを「揺り動かされない御国」と表現し、黙示録では「聖なる都」「新しいエルサレム」(21 章)と表現します。「御国」とは英語でキングダム(Kingdom)、ギリシア語では「バシレイア」($\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\acute{\iota}\alpha$)、ヘブル語では「マルフト」(מַלְכוּת)で、すべて王が支配する国を意味することばです。「新しいエルサレム」には王としての支配がないにもかかわらず、「新しいエルサレム」と「揺り動かされない御国」はなぜか同義なのです。

1. 「永遠の御国」の「型」としての千年王国における「シャハイナ・グローリー」

●前回で取り上げたように、メシア的王国の「エルサレム」(雅名=シオン)におけるシャハイナ・グローリーの現われは、王であるメシアが着座される聖所としての神殿にありました。そして、その栄光の現われはエルサレム全体にも及んでいます。そのことを預言者イザヤは次のように描いています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 60 章 1～3 節

- 1 起きよ。光を放て。**あなたの光**が来て、【主】の栄光があなたの上に輝いているからだ。
- 2 見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。
しかし、あなたの上には【主】が輝き、その栄光があなたの上に現れる。
- 3 国々は**あなたの光**のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。

●上記の箇所にも、二度繰り返されている語彙があります。それは「**あなたの光**」(「オーレフ」 אורֹף)です。ここでいう「あなた」とは擬人化された「エルサレム」(シオン)のことです。また、三度繰り返されている語彙もあります。それは「**輝き**」と訳されている語彙です。ただし、1 節の「輝いている」(「ザーラハ」 נָרָא)は動詞で「必ずそうなる」という意味の預言的完了形で使われています。2 節の「輝き」は「ザーラハ」の未完了形「イズラハ」(נִרְאֶה)です。なぜならその輝きは「輝き続ける」からです。そして 3 節の「輝き」は名詞の「ゼラハ」(נֹרָא)です。文法的用法は異なっていますが、重要なことは、月が太陽の輝きを反映しているように、シオンを照らす輝きが、メシアの栄光の輝きを反映したものであるということです。全地において、シオンだけが特別に主の栄光の輝きを反映しているために、諸国の民はその光の輝きを求めてそこに集まり、その輝きに照らされて歩むようになるのです。千年王国は王であるメシアの光が放たれているシオンを中心にして統治されるのです。

●千年王国においては、シオン(エルサレム)に常時住むことが許されているのは全世界から主によって集められた**イスラエルの民**たちです。エゼキエルはイスラエルの 12 部族に与えられる地の配分を預言しています(エゼキエル 48:1～14)。そのときに各部族に配分される土地の領域は、右図にあるように、かつてソロモン王が支配した地域です。この意味でもメシア王国はダビデ・ソロモン王国の失敗を踏み直していると言えます。

●エルサレムを中心として北と南に新しいパターンによって、ほぼ均等に配分されます。全体の中心は神殿のある特別区で、そこには神殿と祭司たち、レビ人の住む場所があり、また「町」と言われる共有地があります。旧約ではレビ人が各部族に配分配置されましたが、千年王国では逆に、各部族から町に住む者が配置され、そこで収穫された物は神殿にささげられました。その町は、一辺が 4,500



イスラエルの部族ごとに割り当てられた相続地

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

キュビト(約 2.4km)の正方形で囲まれており(赤枠)、各方向にそれぞれ三つの門があり、それぞれ各部族の名前が付けられています。その「町」につけられた新しい名前は「アドナイ・シャーマー」(יהוה שָׁמַר)で、「主がそこにおられる」という意味です。そこには特別な主の栄光の輝きが放たれ、人々がそこに引き寄せられるようにしてメシアを礼拝しに集まってくるのです。実は、これがやがて特化した形として登場する「**聖なる都**」、すなわち、「**新しいエルサレム**」の構造を予表しているのです(黙示録 21 章)。

●なぜ、新しい「都」であるエルサレムが立方体なのでしょう。それは、千年王国の中心にある「町」が予表しているだけでなく、聖なる都が旧約の幕屋における**至聖所**の部分だからです。至聖所は正方形です。**そこは神と人とが唯一交わることのできる神聖な場所だったので**。それが、最終ステージにおいては、「聖なる都」「新しいエルサレム」として、新しい天から下ってくるのです。ちなみに、永遠の御国における「新しいエルサレム」の規模は一边が 12,000 スタディオンです。これを現代の寸法に直すと、2,220km になります。

●さて今回は、神のご計画の最終段階としての「新しい天と新しい地」における「永遠の御国におけるシャハイナ・グローリー」について目を留めたいと思います。それは新約聖書のヨハネの黙示録にのみ啓示されています。しかし、旧約のイザヤ書にも「**新しい天と新しい地**」について言及されている箇所があります。それは以下の箇所です。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 65 章 17~19 節

17 **見よ**。まことにわたしは**新しい天と新しい地**を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。

18 だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。

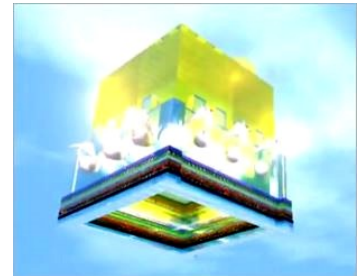
19 わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。

●「**新しい天と新しい地**」というフレーズはこの箇所だけでなく、イザヤ書 66 章 22 節にも登場します。ただし 66 章での強調点は、イスラエルの子孫とイスラエルの名が永遠に続く比喻として、主が創造される「**新しい天と新しい地**」が用いられています。イザヤ書にある「**新しい天と新しい地**」は、黙示録に登場する「**新しい天と新しい地**」と名前が同じであったとしても、区別して理解する必要があるとする立場があります。というのは、旧約の預言はすべて千年王国に関するものだとして決めつけているからです。確かに、イザヤ書には「**新しい天と新しい地**」というフレーズがあったとしても、「**新しいエルサレム**」という用語は登場しません。「**新しいエルサレム**」がはじめて登場するのはヨハネの黙示録 21 章です。だからといって、イザヤ書 65 章の「エルサレム」は「千年王国」におけるエルサレムのことを啓示していて、最終ステージとなる永遠の御国にある「**新しいエルサレム**」とは関係ないということにはならないと考えます。むしろ、それは神のご計画の中で何らかの関係性を示唆していると考えの方が自然です。

2. 「聖なる都、新しいエルサレム」におけるシャハイナ・グローリー

【新改訳改訂第3版】黙示録 21 章 1～4 節

- 1 また私は、**新しい天と新しい地**とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。
- 2 私はまた、**聖なる都、新しいエルサレム**が、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。
- 3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。
「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、
- 4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しきもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」



●まずは、「新しい天と新しい地」にある「聖なる都」「新しいエルサレム」の特徴について見てみましょう。

(1) 神の計画が完全に実現している「シャーローム」の世界

●神の最終段階としての「永遠の御国」は、神があらかじめ天において定めておられたご計画が、完全に、最高度に実現している世界です。そこには神のみこころも、神の御旨と目的も成就し、満ち満ちている「シャーローム」の世界です。「以前にあった天と地は過ぎ去って、もはや海もない」とあります。「海」とは神に敵対する悪の存在と働きを象徴しています。それが無いということは、悪も罪による呪いも死も一切ない、完全な「シャーローム」が満ち満ちている永遠の世界です。もはや「死もなく」とあるのは、人間にとっての最終の敵がサタンではなく、人間の罪によって入ってきた「死」そのものだからです。その「死」がないということは、死によってもたらされる「涙、悲しみ、叫び、苦しきもない」世界となることを意味しています。千年王国では朽ちるからだを持つ者たちが存在していたために、罪による死がありました。しかし、以前の天と地が滅び去った後では、完全な神のシャーロームが支配する世界となったのです。その「シャーローム」の世界で最も重要なことは、神と人とが共に住むという神のヴィジョンが実現することです。神の御顔を直接的に仰ぎ見る世界です。これが神のご計画の究極の目的です。

●千年王国にもエルサレムには神殿がありましたが、「聖なる都」「新しいエルサレム」においては「神殿」がありません。なぜなら、「万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だから」(黙示録 21:22)です。

【新改訳改訂第3版】黙示録 21 章 22～23 節

- 22 私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。
- 23 都には、これを照らす太陽も月もない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。

(2) 神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりとなる

●千年王国においては、メシアによって光がエルサレムを照らしていました。つまり、それはエルサレムという限定された場所においてのみでした。しかし、神のご計画の最終段階である「新しいエルサレム」においては、光源としての「太陽」や「月」の必要がありません。なぜなら、本来の「光」が「新しいエルサレム」そのものを照らしているからです。したがって「夜」もありません。本体を写し出していたこれまでの「型」はすべて消え失せ、本体そのものが姿を現わしている世界だからです。つまり、千年王国におけるエルサレムを覆ったシャハイナ・グローリーは、永遠の御国においては天から下ってくる「聖なる都」「新しいエルサレム」それ自体なのです。これまででもそうでしたが、シャハイナ・グローリーがあるところには、必ずや神の声が語られています。黙示録 21 章でも同様です。

【新改訳改訂第3版】黙示録 21 章 3～7 節

3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ、**神の幕屋が人とともにある**。

神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。

なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

5 すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。

「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

6 また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、
渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。

7 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。・・・」

●これが、私たちが俗に言っている本当の「天国」(御国)です。メシア的王国である千年王国でも、「天国」(御国)としての祝福が私たちの想像をはるかに越えた形で実現するのですが、それは最終的な「永遠の御国」の型でしかありません。本当の「天国」とは「永遠の御国」であり、そこに目を留め、そこに備えられている世界にあこがれ、慕い求める必要があります。そこは、神ご自身が贖われた人々とともにおられて、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない世界なのです。神がやみの中から光を呼び出すまで、神の世界には人はいませんでした。しかし今や、永遠において、かつ完全な形において、「神の幕屋(=住まい)が人とともにある」のです。

●また、「新しいエルサレム」においては、エデンの園にあった「いのちの水の川」と「いのちの木」が回復されています。回復される前に、一度、天にあるもの、地にあるものすべてが揺り動かされます。そして揺り動かされるもの一切が取り除かれた後に、はじめて新しい「揺るぐことのない御国」が完成するので、とすれば、以前の「エデンの園」に勝る世界が回復されていると言えます。

●事実、私たちはまだ「朽ちないからだ」に変えられていないために、実際にそこへ行ってみなければ、は

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

つきりしないことが数多くあります。しかし、ヘブル書の著者は「**信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないのを確信させるものです。**」(11:1)とあります。それゆえ、私たちはパウロが言うように、「**私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。**」(Ⅱコリント 4:18)との信仰を告白しなければなりません。この告白は、今の私たちの考えや歩みを完全に変わってしまうほどの「心強さ」をもたらすと信じます。それはおそらく、パウロと同様に「天から与えられる住まい(神と共にいる)を着たい」と私たちに望ませ、「むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうが良い」とさえ思わせるほどになるのです。

3. アブラハムが旅した範囲は「新しいエルサレム」の規模を啓示していた

●これから述べる部分は、「シャハイナ・グローリー」というテーマとは異なる付録的な部分ですが、天の御国の視点から見るなら、聖書の歴史の出来事の必然性が明瞭になるという意味で取り上げたいと思います。たとえば、「新しいエルサレム」の規模はアブラハムの生涯に啓示されていたことを知ることができます。アブラムがウルというところから神に召し出されて、ハランまで来て、そこに住み着きました。しかし父テラが死んだ後に、再び、「わたしの示すところへ行け」という主の声を聞いたアブラムはカナンに行き、さらにエジプトにも行き、再び、カナンの地に戻りました。そこで「あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫に与えよう。・・・立って、その地を縦と横に**歩き回りなさい**。わたしがあなたに、その地を与えるのだから。」(創世記 13:15~17)と神は約束されました。アブラムは信仰の試みに失敗した後で、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を**歩み**、全き者であれ。」(同、17:1)と神から語られて、アブラムがアブラハムに、また妻のサライがサラに名前が改変されました。名前の改変は、二人が主の前を主体的に「歩く」という意味の「ハーラフ」(הלך)の頭文字の「ヘー」(ה)が入ったことによるものと理解します。アブラハムはその生涯の最大の試練の時に、モリヤの山に**行け**という主の命令に従い、そこへ**行きました**。そしてその山の上で主のご計画のヴィジョンを示されたのです。そのモリヤの山は後の「エルサレム」です。また、アブラハムが**歩いた**地域が、やがて「新しい地」における「新しいエルサレム」の舞台となり、その中心地がエルサレムなのです。

●太文字の部分にはすべて「**歩く**」を意味するヘブル語の「ハーラフ」(הלך)が使われています。この「ハーラフ」(הלך)は神と人とのすべての歩みを表わす統括用語です。アブラハムが歩いた範囲と神のご計画には密接な関係があったことを、私たちは黙示録の 21 章、22 章ではじめて知らされるのです。神の緻密なご計画がなんと歴史の中で啓示されているのです。それゆえに、神のご計画の全体を鳥瞰的に知る必要があるのです。

●創世記 15 章 18 節に、「その日、【主】はアブラムと契約を結んで仰せられた。『わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。』」とあります。また、イザヤ書の以下の箇所にも「新しいエルサレム」の範囲をうかがわせる預言があります。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 19 章 23~25 節

23 その日、エジプトからアッシリアへの大路ができ、アッシリア人はエジプトに、

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。

24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。

25 万軍の【主】は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」

●この地域の規模が、やがて新しい地に天から降りてくる「新しいエルサレム」の規模の範囲なのです。その範囲は一辺が 12,000 スタディオン(2,220km)の立方体であり、右の図のようにエルサレムを中心とした地域なのです。神のご計画はすべてエルサレムを中心とした歴史の舞台の上にあったことが分かります。神のご計画の中心にあったことを知りつつ、再度、聖書を横に読むならば、さらなる神のご計画の偉大さと緻密さを知って驚かされるに違いありません。

●ヘブル書によれば、アブラハムは「堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた」とあります(ヘブル 11:10)。その「都」とは、黙示録 21 章に記されている、神によって設計され建設されることころの「新しいエルサレム」のことだったのです。アブラハムは信仰によってそれを見たのでした。まさに信仰の父と言われるにふさわしい大きなスケールです。信仰の父と呼ばれたアブラハムは千年王国において実現する神の約束を越えて、さらに永遠の御国のことを「揺るぎない確固とした都」として待ち望んでいたのです。とすれば、信仰を同じくする私たちも、主にある者として確信をもって待ち望まなければなりません。



ベアハリート

●今日、教会に召し出された人々はこの御国への招きを知るために、神のご計画全体を鳥瞰的に知る必要があります。置換神学はこの神のご計画を見えなくさせる聖書の読み方に導くゆえに、それを教会から捨て去る必要があります。そして、神が本来計画している神のヴィジョンから再度聖書を読み直さなければなりません。そのためには、最終の永遠の御国のヴィジョンを知るために、「知恵と啓示の御霊」を求めなければなりません。と同時に、人となってこの世に来られたイエシュアが語ったこと、そしてなされたわざ(奇蹟)の一つひとつが、すべてこの永遠の御国についての福音のデモンストレーションであったという視点から聖書を読み直すことが不可欠となるのです。今日、キリスト教会において、「**ヘブル的視点から聖書を新しく読み直すことの必要性**」が叫ばれ始めています。これまで教えられてきた「**理解の型紙**」を再度見直す勇気と、さらにそこから脱け出す勇気が求められているのです。

シリーズ【完】

2016.1.17